

# 全自者協ニュース

- ・全自者協ニュース／第19号／2002年（平成14年）3月25日
- ・発行所＝全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595
- ・発行人＝石丸晃子 ・編集人＝大瀧 満

## 職員の育ち

あかりの家 三原 憲二

以前、私は知的障害児施設にいた。子どもたちは毎日のようにソフトボールをし、我々とはという意欲や社会性を育てるために、関係と環境を縦横に駆使した。そのキーワードは「動機付け」であった。

看護学校生等との対外試合前には巻紙に「挑戦状」を書いてもらい、試合の1ヶ月前から特訓が始まる。試合前夜にはユニホームを枕もとに置いて寝かせた。当日はプラカード嬢を先頭に「ゴーゴー掛布」をバックに入場行進を行い、実況中継をしながら試合を進めた。

グローブは私物化し、できるだけ新品を渡して自主管理棚も作った。自主練習用の軟球使用には明文化した社会的なルールを作り、違反すればペナルティーを科した。20年も前の話である。ちなみに、半数は重度で、中軸バッターは自閉症のA君であった。

実習生の記録は生き生きしていた。保母になりたい動機と目の前の展開が実習初日から握手できる。子どもたちの喜びが自分の喜びとなり、その喜びで子どもたちとつきあっていく。そういった循環がすぐ成立する。

ひるがえって、われらの「発達障害の中で最も処遇が困難な自閉症」の彼らたちは、次から次へと無理難題を押し付けてくる。石丸会長流に言えば「人が生きることを意味をさえ問いかけてくる厳しさがある」。

例えてよく言うが、職員の育ちを10段階とすると、知的障害者施設では1段階から2・3段へ上がることは福祉を志す者にとって容易である。一方で自閉症者施設では2・3段階がやた

らと高い。ただ、どちらの施設5段階以上となると個人の努力と感性が要求される。

とすると、新人を2～3段階目上げること、とりあえず4段階目まで育つための環境の有無が、自閉症者施設の質を分けることになる。

98年の全自者協兵庫大会では「職員研修」をテーマに会員施設よりアンケートを取らせていただいた。その中で、職員の伸びる環境として、いつでも今を問い直せる理念や、施設長のメッセージ性の重要性が浮かび上がってきた。私自身、理念や人生訓は好まない。必要も無かった。しかし、仕事や運営が困難を極めれば極める程、それらは好みの問題ではなくなった。

また、障害の受け止め方や療育技法、そして医療水準は、知的施設では考えられなかった程に大きな位置を占めている。これらが施設の財産として有るか無いか職員の育ちと関係が深い。

職員数も見過ごせない。知的障害者施設の配置基準では職員が育つことに無理がある。量が不足すれば質に転換しない。問題の後追いに終始して、見た目の大変さだけが仕事になる。それでは職員が育たない。というより育つ方向が違ってきてしまう。

最後に、私自身が自閉症者施設の側に身を置いてからの印象であるが、それでも、自閉症者施設は「いくら障害が重くても」を実践的に語るにところへにすぎさを感じた。あきらめない、切り捨てない。その困難な制約のもとで職員が育っている驚きである。

同じ地点に立つべく努めている。

## 第十五回 北海道大会

第十五回全国自閉症者施設協議会北海道大会が十月四日から二日間の日程で北海道札幌市内にあるホテルライフォートを会場に開催されました。今大会の運営にあつては、当施設石山センターが主管（事務局）となりましたが、他道内の五つの会員施設の他、知的障害関係施設、機関、施設利用者の家族等、道内外合わせて約三百名の方々が集い、大会を盛り立てて頂き無事に終了することができました。

初日は、午前に川崎医療福祉大学副学長の岡田喜篤氏の記念講演「自閉症者福祉をめぐる現状と課題」、午後には「就労援助」「日中活動」「地域生活援助」「強度行動障害の援助」をテーマとした四つの分科会に別れ、各分科会とも四時間という長丁場のなか活発な討論がなされました。これらの分科会テーマは単年度企画として、事前に各施設に分科会担当施設としての依頼をし、企画運営をして頂きました。

岡田喜篤氏の講演では、自らが

携わっている研究内容でもある「知的障害」の定義に触れましたが、これについては事前説明の中で支援費策定の為に研究されているものではないことを付け加えた上で話をされ、続いている障害者マナーコメントについては、国外の情報も交えて説明をして頂き、最後に来年度より実施される支援センターの話題等、大変興味深い話を聞くことができました。

二日目は、厚生労働省社会援護局保健福祉部障害福祉専門官の大塚晃氏から「基礎構造改革における自閉症者施設の運営」についての講演がなされ、続いて「制度改革における自閉症者福祉の展望」をテーマとして鼎談がなされました。

大塚障害福祉専門官のお話の中でも現在、話題となっている「地域生活支援と支援費について」の話を聞くことができ、初日の岡田氏の話を深めることができましたように思います。

そして最後の鼎談においては、進行役の石井哲夫氏より、「施設

の今後の役割について」、「自閉症・発達支援センターについて」、「地域生活について」という三つの発題がなされ、厚田はまなす園 木村昭一園長、萩の杜 村上利男施設長、厚生労働省 大塚 晃障害福祉専門官一人一人から貴重なお話を聞くことができました。そして今後についての問題提起として



「地域の理解促進」、「自らの専門性の向上」、「地域ネットワークの構築」、「専門家の養成」、「ニーズ調査」の必要性が話されました。

平成十五年四月には戦後の社会福祉理念とシステムが変わることで、

知的障害者福祉の仕組みが大きく変わると言われていますが、未だに不透明で不安な点が多々あるのが現状であると思われまふ。そのような現実に対して今後私たちが何をすべきなのか今大会がその一助となれば幸いです。

また、今回の大会に参加された北海道の施設利用者の家族の方から後日感想として、「これまで保護者が大多数の講演会には参加する機会があつたものの、このような施設関係者が大多数を占める会への参加はなく、普段知ることの少ない施設側の考え方、意見を聞くことができ、また平成十五年からの改革が進められる中で現実を知り、自分たちが今何が必要で何が足りないのかを認識する良い機会にもなつた」との話を聞くことができました。今後とも自閉症者福祉をめぐつては多くの困難があると思ひます。だからこそ、このような大会が現場サイドのみならず、利用者そして家族と共に発展させていくことが重要であることを今大会を通して自らも再認識させられました。

(石山センター 館林信雄)

## 対談 奥野宏二／石井哲夫

今回は、あさけ学園の園長で全自者協の事務局長をされている奥野氏に自閉症のトータルケアプランについて話しをいただきました。

石井 奥野さんは、現場のリporterとして「地域に根ざした施設」ということを指摘し、あさけ学園のある菟野の町に利用者の多くを地域生活に変えていくという方向を打ち出し、実践されています。

このことは、現在自閉症者が地域において安定した生活を過ごすためにはまだ不十分といえます。トータルに考えて、どのように考えていったらよいものでしょうか。特に自閉症のトータルケアという立場で、このような社会福祉改革にどう対応したらよいかが問題ですね。

奥野 学園ではこのように暮らせるのに外泊したら大変な状況になってしまつとか、入所から通所に変えた時に利用者の崩れを経験します。入所施設の場合は二十四時間、職員が何とでも出来る中でやっています。そのためそれをそのまま地

域生活に適用しようと思つても歯が立たない現状があります。地域というのは、そんなに100パーセント整備されていない場合が多いと思います。我々が彼らの本当の地域援助を考える場合には障害者に関わる人たちが彼らの援助者になれるような、あるいは彼らと普通に関わつていける人にしていく、そのための援助に切り替えていかなければならないと思います。

自閉症者へのトータルケアプランとは

石井 私自身、親御さんと話しをする時にトータルケアが大事であることをいっています。トータルケアプランを考えていく時に真っ先に考えなければならぬことは関わる人の「自閉症の理解」をどうするのかだと思います。

奥野 自閉症児者へのトータルケ

アプランを一般論としては作れると思います。つまり、自閉症の人が生まれて大きくなっていく、ライフステージのそれぞれの段階のそれぞれの課題とかニードについて、本人や家族に寄り添つて継続的に、きちんと責任を持つて、しかも実際に役に立つ援助を行なっていくことだと思います。平成十四年度の「自閉症・発達障害支援センター」は地域の拠点として想定していると思います。ただ、何かセンターがあれば全て解決するようなイメージを持ちやすいことが心配です。問題は単なる理念だけではなくて、実践的な理念といえますか、それからどういう方向を目指して実践をしていくのかと、あるいはその実践を支えていくような具体的な援助技術がどれだけ備わっているのかが重要なことだと思います。

石井 「トータルケア」とは要するに子どもが生まれてから死ぬまでの色々な意味での社会的な関わりの中で、できるだけ一貫性のある援助を受けることです。残念ながら今はみんなばらばらだと思います。私自身は、それを行政の人にわかつてもらいたいとかねがね

思つており、今度、行政対応としては「自閉症・発達障害支援センター」を一つの起爆剤として、地域ケアをしていこうとする行政の姿勢が現れてきたことは、高く評価できるわけですが、問題は中身ですね。

人々との関係の中で生きていく育成を目指して

奥野 障害者のトータルケアを考える場合に、一番大事なのは何が支援の目標になるのかが問われるべきだと思います。ただ地域で暮らしていれば、施設ではないからいいんだということではないはず。私は、自閉症を中心とした発達障害者の支援は、人々との関係の中で生きていくための育成だと思つています。これは単に障害を改善するかしらないかという問題ではなく、社会的な存在として色々な人との関係の中で生きていき、成長していくことだと思います。

要するに生物学的な欲求レベルの行動を行ない、周りの状況と関係なくとにかく自分の欲求をどう満たそうかしている人たちを単にこれはこの人のニードだから、この人の本来の姿だからという形では、社会的な人としては育つてい

かないのです。社会的な色々な関わりや経験を通じて、欲求は、要求に変わっていくわけです。基本的障害と二次的、三次的に出てきた問題を区別することが大事だと思います。また、基本的には改善が困難な障害部分があると思いますが、それだけではないはずですが、我々が行動障害のある人々を目の前にした時に、行動障害の華々しさに目を奪われて、全てこの人の障害はどうしようもない基本的な障害であるかのように錯覚をしてしまうのは間違いであり、それでは、何も解決していかないのです。

石井 自閉症の人たちは、どうしても難しいのかといったときに、本質的な脳障害があつてそれがわかりにくかったり、具体的に現れている姿が、非常に他の障害者と違って、どうも社会の決まりとか常識がわからないとか、その場の状況に入っていないということがいえると思います。しかし、それをどう見るか、また、どう対処したらよいかつていうことについて、今、奥野さんがいわれたことは大事なことだと思います。私は自閉症の人を何とか大事にして援助し

たいと思います。やっぱり力になることはやってあげたいと思うのです。しかし、自閉症の人に向かったときに、なかなか関われない。どうして私が好意を持つて呼びかけているのに対応をしてくれないのかと思うのです。でもそれは、私の側の気持ちなのです。何故、自閉症の人たちはそうするのかを考えないといけないのです。

奥野 ドナ・ウイリアムズの「自閉症だったわたしへ」という本があり、あの中でよく出てくると思いますが、自分が苦手な人と関わる時には人格を切り替えたりします。あれを私は「自閉症の世界に逃げていく」といいます。本来は意識を集中してコントロールできるのだけれども、よほどそれを意識していないと続かなくて、ふつと緩んだ時に流れに身を任せてしまう。あちこち体が動いて、周りの状況にも全然入っていない感じがの人たちを見るわけです。でも、それはかなり意識を集中していくことを繰り返していく中で、あるいは仕事をしたり、色々な適応行動を毎日行なっていくために、自分の体を一生懸命意識しないと、できないわけですから、そ

うする中で自ずから開花されてくるのです。

それからもう一つは、人として育っていく中で生じてくる問題が自閉症の人たちを考える場合に忘れられてしまう場合が多いと思います。周りで安易にこの子はいってもわからない子だからと、幼児的な万能感を修正されないですつ



ときてしまうことです。それから自分の周りの状況についての色々な情報がなかなか入りにくいということが障害としてあるので、限られた情報の中で色んなことを自分なりに考えているわけで、現実検討が非常に未熟な所があります。それから、彼らも周りのことが少しづつわかるようになってくる中で、自分が失敗したくないとは思

っているのだけれども失敗してしまうとか、うまくいかないために、一番手近な家族にそれを求めていき、叶えられないと家族さえも攻撃してしまう。そういう悪循環を繰り返していることがあります。

石井 自閉症の人たちがなかなか難しいのは、先にあげたドナ・ウイリアムズの例ですけれども、奥野さんはドナが困ったときに、自閉の世界に逃げ込んでしまうというようにいわれたわけです。

しかし、私はそうは思わないのです。ドナはあの本の中で、「自分と偽りの人を演じている」というので、それは本当の自分ではないというのです。それは無理して振舞っているという感じがあるので、だから無理しないような自分の感覚的な世界の方が本物の自分だと思つていて、それを本物の自分だと思つていて、私たちがから見るとそれはおかしいと、それは自閉の世界に逃げ込んでいるというけれど、僕はその人の人間としての値打ちは、自分はこれが本物の自分だと大事にしていることにあると思わなきゃいけないと思うのです。楽だからといって、い

って、いつでも自閉の世界の中に籠もってはいれないとはいえないのです。だからそのところで、援助する人には自閉症の人をわかる立場と、それからもう一つは社会の立場から自閉症の人になんとか社会に通用する態度なり、行動を身につけてもらいたいとする二つの柱を持って援助をすることだと思えます。

自立の支援のあるべき姿

奥野 私たちの経験の中で障害の重い人たちでも、自分が色々な場面につかかっては失敗して、「自分はこういう力しかないんだ、こういう時には誰かに助けてもらわないといけないんだ」といことをわかって自分で選んでいくわけです。すなわち、自立というのは可能だと思ふのです。要するに、我々が援助をやっていく場合にとかく手触りのいい概念や言葉でいわれてきて、サーピスというものを量的にどう増やすかとか、あるいはコンピュータのようにサーピスを留意するとかいわれてきていますが、果たしてそうなのでしようか。量的にサーピスだけできて、本人たちは相変わらずになってしまふことがないのかが心配です。

石井 今、奥野さんがいわれたように、その人たちの経験の中に、学習があつて、抱えている課題の解決法が生まれてくるわけです。自立というのは一人で何でもかんでもやるということではないので



す。自立というのは、自分で考えて、自分で選んで、自己決定をしていく。自分で決めたことが、少なくともその本人のためになり、その周りの社会に大きなマイナスにならないこと。つまり、世話をする仕事をする人の世話になつてもかまわない。だけでも、そういう考えを持たない人が周りにいる内容について、援助はできないわけなのです。

そのような現実の世界の中で人と関わったり、物と関わったり、生活を営んでいく、その人の状況について私たちは理解し援助していくという考え方をこれは基本的な考えとして示されたと思うので

奥野 今、基礎構造改革ということがいわれ、今までの施設中心の障害福祉の流れが、地域中心に移行していくといわれています。ただ、私は、あまりにも入所施設の対極として地域支援を強調しすぎていると思います。あと、そういう地域福祉ということを行う中で、「うちも地域ケアを行なっています。入所だけではなく、グループホームも行なっています。通所も行なっています。ショートステイも受けています。シヨートステイを寄せ集めて行なつていけば、それが地域ケアだという、変な捉え方があるのではないかと思います。そういうものが地域ケアといわれるとしたら、非常に貧しい発想だと思えます。

私どものあさけ学園では、数年前からこれまでの実践を基盤として「自閉症総合援助センター」といういい方で地域支援を行なつて

きました。私どもが施設で二十四時間の様々な療育的な支援を行ないながら、その中で蓄積されたノウハウを施設そのものが援助機能の集合体として活かしていくことをイメージしています。

石井 本来、施設というのは一時的な避難所であつて、そこから元へ戻す援助というものが行われなければならぬと思います。地域で生活できるように家庭に対する援助というものを考えたり、それを補うためのデイケアなりナイトケアを施設が行つていかなければならないと思います。

トータルケアというのは、一ヶ所だけができて、近くは全然逆のこと行っているのでは、トータルもヘチマもないのです。ごく普通の人間の感覚や判断や感情でわかつてもらえるような援助を行なうという考え方が広がっていき、一人の自閉症の人の周辺が統合されていけばいいわけです。



## 加盟施設紹介

### れんげの里

本格的に土地を探し始めてから五年、「よりよい暮らしの場をつくっていく拠点」として入所施設を位置付け、三十二家族が発起人となって昨年の四月に「れんげの里」を立ち上げることができました。

本当に多くの方々のご指導、支援のおかげで感謝いたしております。

ノーマリゼーションの理念を受け入れるにはほど遠い住民意識、権利侵害だといえるほどに低い最低基準等多くの課題と向き合っており十分ではないにしろ、全室個室、十人単位の小舎制でスタートさせることができました。

障害故ととらえられがちな事象のいくつか、ハードと、職員の姿勢のあり方で改善されていく現実、専門性の有り様を考えさせられる毎日です。

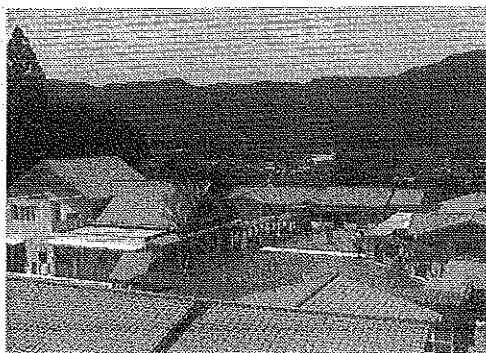
そんな施設の生活であれ、集団生活に変わりはなく、日常的な人入との交流も困難です。

私達は、彼等の願いを「れんげ

の里」の枠に閉じ込めることなく、現実を引き受け、足を地に着けて、入所施設のもつ課題に挑戦していく決意しております。

自閉症者の幸福を追求してこられた先達のご苦勞に感謝し、その実践から学び、彼等の幸せづくりの仲間に加えていただくことができれば幸いです。

施設長 柳誠四郎



### ゆうあい

山口県の中央部、防府市向島。

当場所は、瀬戸内海に張り出した橋づたいの島で、夏至の頃は点在する島影の彼方に海と空を朱色に染めながら沈む夕陽が見られます。冬至近くになりますと、幾分紅みを増して岬の先端あたりに沈む夕陽は、岬や小島のシルエットを益々濃くして視界すべてに何かを訴えているようです。

こんな場所に「ゆうあい」は平成十三年四月、三十人定員で開所しました。8000㎡の敷地に大小三つの中庭を取り巻くように、1300㎡の建物。居室は9・9㎡の個室にしました。自閉症の方にはこれがよかったです。思いの外安定した、静かな生活が送れています。利用者の平均年齢が二十三歳、職員の平均年齢も施設長を除けば二十七歳と若いのは新しい施設の証でしょうか。

防府市という場所は、奈良時代からこの地域の中心地として栄え、現在まで脈々とその伝統を伝えていきます。同時に広大な干拓地跡の工場地帯、地の利を利用した海運業。新旧入り乱れ、福祉もまさに大河の流れの泡沫のようなカオス

の様相を呈しています。

「ゆうあい」は施設を、ケア付アパートと考えています。今後どのような活動や作業を、この地域でどのように展開していくかが大きな課題です。まずは人間が好きであることから急がず、あわてず。

施設長 河本政治

